

ヴァイツゼッカーの搾取概念

長 浦 建 司

一 はじめに

この四半世紀の間、マルクスの経済学への近代経済学からの批判は、いわゆる転形問題を軸に行われてきたといっても過言ではない。私の見るところ、転形問題の検討を通じて得られた主要な成果は次の二点である。すなわち、マルクスの転形の手続きは部分的に誤りを含むにせよ、その含意は、資本主義において生産的プロセスが労働価値ではなく生産価格で評価されることによって搾取がいかに隠蔽されるかを示すことにあったことがほぼ明らかになったこと⁽¹⁾、均等利潤率が正值をとるのは搾取率が正である場合に限られることがマルクスの基本定理(FMT)として証明されるに至ったこと⁽²⁾である。転形

問題をめぐる論争はこのような形でひとまず結着したと考えられる⁽³⁾。

しかしながら最近では、転形問題に関してというよりもむしろマルクスの搾取概念そのものについて近代経済学の側からしばしば批判・言及されるようになってきている。成長率と利潤率が等しい限り搾取は存在しないとするヴァイツゼッカーの見解⁽⁴⁾や、新古典派においても剰余労働概念は認められていたというスティードマンの見方⁽⁵⁾がその代表的なものである。だが他方で、新古典派においては均衡のもとでは剰余が発生せず搾取率はゼロになるという仮定があるというアルバートの見方⁽⁶⁾もある。このように、マルクスの搾取概念をめぐる立場は様々であるが、伝統的マルクス経済学の側からこれらの見解に対して検

討が加えられることは皆無に近く、一部のマルクス経済学者からは、新古典派経済学の総帥と目されるサミュエルソンにおいてもマルクスの搾取理論は認められているという評価⁽⁷⁾さえ下されている。

本稿の課題は、マルクスの搾取理論に対する最も先鋭的な批判の試みであると思われるヴァイツェッカーの見解を検討することである。彼の議論は、恒常成長のもとで資本蓄積に対応する労働を必要労働とみなすことによって搾取部分を資本家消費に限定し、かつ、黄金成長経路のもとで成長率と同じ割合で労働が減少してゆく技術進歩を想定すればマルクスの搾取率ゼロと正の利潤率が両立すると主張し、これをもってマルクスの搾取理論の一般化と称するものである。ヴァイツェッカーのこのような見解は、マルクス経済学の基本的立場に對立するものであり、FMTに対する重大な挑戦であるということができる。マルクスの資本主義分析の方法を継承する者にとってヴァイツェッカーの見解を検討することは、ある意味では転形問題そのものよりも重要な課題であるといえるかもしれない。

以下では、結合生産が存在しない通常の流動資本モデ

ルをとり、需給一致という最も単純な状態を想定する⁽⁸⁾。マルクスの搾取理論の含意は、まず最も単純な形態において明らかにされねばならないと考えるからである。

二 オーストリア学派の生産構造と

synchronised labor costs

1 ヴァイツェッカーの問題関心

ヴァイツェッカーの特異な搾取概念の検討を目的とする本稿では、最初にマルクス及びその後継者への彼の批判的認識と彼がよって立つ理論的枠組とが示されねばならない。

資本主義において労働者は、資本家と雇用契約を結んで労働力を提供しその対価として賃金を受取る。資本主義ではこの労働力は商品であり、その価値は労働力を再生産するのに必要な生活資料の価値に等しい。しかし、十分に生産的なシステムでは、労働力商品はその再生産に必要な生活資料を生産するのに必要である以上の労働量を支出することができる。雇用契約後の労働力は資本家の手中にあるから、総労働量と必要労働量の差額たる剰余労働量は剰余価値を形成し、それは資本家に属する。

このように、契約の自由があっても、労働を行うことなしに財を得ることのできる階級と自分自身の労働生産物の一部しか受取らない階級とが存在することになる。それは資本主義以前と同様であり、ただ搾取の形態が異なるだけでその実体は全く変わらない。すなわち、マルクスの搾取の実体は、労働者が自己の労働生産物の一部しか受取らず労働の一部は自己の意志にかかわらず常に他人のための労働であることであり、搾取の形態は、それを可能にする仕方すなわち法的に強制されるかそれとも契約の自由に基いて行われるかという点に関わるものである。

だがヴァイツェッカーは、マルクス及びその後継者が搾取の実体と形態を混同していると批判するのである。

「マルクス主義者の搾取の取扱いは搾取の特殊な形態を非常に強調するので、これは搾取の実体とそれが資本主義システムで取る特殊な形態との混同をひきおこしがちである。搾取の実体は、永遠の基礎上で、そのグループによって供給される労働量でもって生産される財よりも多くの財を得ることができる人々のグループないし階級が存在することである。」⁽⁹⁾

すなわち、ヴァイツェッカーの搾取の定義は、社会の如

何にかかわらず労働を支出して消費財を得るグループの間に単位労働当りの消費財取得の不平等があるとき搾取が存在するといふものである。⁽¹⁰⁾ これはマルクスの搾取の定義と二点において異なる。第一に、マルクスの定義がさしあたり資本主義に限定され、それとの対比で資本主義以前の搾取が搾取形態の違いとして問題にされているのに対し、ヴァイツェッカーの搾取は、資本主義とそれ以前の社会だけでなく社会主義をも含めたいわば歴史貫通的な概念として定義されていることである。第二に、マルクスの定義が資本家の得る消費財と資本蓄積部分とに關してなされているのに対して、ヴァイツェッカーのそれは、単に消費財取得の不平等に限られ蓄積部分は問題にされていないことである。ヴァイツェッカーのこのような搾取概念は、オーストリア学派の経済観と密接に結びついている。

2 synchronised labor costs と生産概念

ヴァイツェッカーの搾取概念は彼の想定する生産構造から得られたものである。従って、その生産構造の内容と意味が検討されねばならない。

零期末に財一単位を得るために零期首に a_0 の労働と

(111) ヴァイツェッカーの搾取概念

生産財	……	$A^3 a^{0j}$	$A^2 a^{0j}$	$A a^{0j}$	a^{0j}
労働	……	$a_0 A^2 a^{0j}$	$a_0 A a^{0j}$	$a_0 a^{0j}$	a_{0j}
		-3	-2	-1	0
					1

表 1

れば、マイナス一期首には $a_0(a_{1j}, \dots, a_{nj})$ の生産財の投入が必要であるとする。 $(a_0$ は労働投入係数ベクトル)

の労働と $A^2 = A A^0$ (A は生産財投入係数行列) の生産財が投入されねばならない。そのためにはマイナス二期首に $a_0 A^2 = a_0 A A^0$ の労働と $A^3 = A A^2 = A^2 A^0$ の生産財の投入が必要である。こうして、生産財と労働の投入は表 1 のように描くことができる。この表で、上の部分は零期末に j 財一単位を得るために必要な中間財を示し、下の部分は「中間生産物が、最終生産物の必要条件である労働投入の流れにどのように分解されるか」を示している。

次に、ヴァイツェッカーが

想定する最終生産物が消費財のみからなる恒常成長を考えよう。零期末に得られる消費ベクトルを e 、斉一成長率を g とすれば、一期末に得られる消費財は $(1+g)e$ であるから、一期首に $A(1+g)e$ の生産財と $a_0(1+g)e$ の労働が、また零期首には $A^2(1+g)e$ の生産財と $a_0 A(1+g)e$ の労働が投入されねばならない。さらに、二期末に得られる消費財は $(1+g)^2 e$ であるから、二期首に $A(1+g)^2 e$ の生産財と $a_0(1+g)^2 e$ の労働が、また一期首には $A^2(1+g)^2 e$ の生産財と $a_0 A(1+g)^2 e$ の労働が投入されねばならない。こうして、各期の投入を生産財と労働に分けて示せば表 2 a、b のようになる。表の最下段は零期末に得られる消費財 e の生産のための投入であり、その上段は一期末に得られる消費財 $(1+g)e$ の生産のための投入等々である。この表を横に見れば、特定の期末にあらわれる最終生産物を生産するのに必要な生産財と労働の流れを、縦に見れば、各期の最終生産物の生産にそれぞれ寄与しながら並存している生産財と労働とを読みとることができる。このような生産プロセスは、ヴァイツェッカーによって次のように把握される。

「もし統合された成長経済システムを想定すれば、い

(以下、SLCと略記する)と呼ぶものがこれである。零期末に得られる最終生産物たる消費財 o の「価値」は Π_0 であるが、これは、表2bの零期首に存在する労働を縦に合計することによって得られる。

$$\begin{aligned} & a_{00} + a_{01}A(1+g) + a_{02}A^2(1+g)^2 + \dots \\ & = a_{00} \sum_{i=0}^{\infty} A^i (1+g)^i = \Pi_0 \end{aligned} \quad (2)$$

以上のように、ヴァイツゼッカーの「価値」は、恒常成長を可能にするための生産手段の増加分を生産するのに必要な労働までも含んだ社会的労働コストと解される。

ヴァイツゼッカーは議論を恒常成長に限定する最も重要な理由として、計画経済において合理的計画者は恒常成長における経済計算に重大な関心をもたねばならない点をあげている。⁽¹⁷⁾ SLCは恒常成長を可能にするために合理的計画者によって設定される価格であり、ヴァイツゼッカーがSLCを「合理的価値」とも呼ぶのはこのためである。こうして、ヴァイツゼッカーの問題関心は「価値」にオペレーショナルな意味を与えることであるが、彼はこのような観点からマルクスの価値概念を批判しようとするのである。

三 価値・生産価格・SLC

1 価値と生産価格

価値、生産価格及びSLCは形式的には同一の生産のプロセスを評価するための分析用具である。しかし、その意味はそれぞれ異なる。まず価値と生産価格についてまとめておこう。なお、本稿では、一貫して賃金後払いを想定する。

いかなる社会でも、人間が自然に働きかけて生産を継続することが社会の存立条件であることはいうまでもない。特定の生産物を生産するためには、生産過程でどれほどの労働と生産手段を組合わせるかがデータとして与えられねばならない。この意味で生きた労働と生産手段は共に生産要素として機能する。だが、問題はここから始まる。生産過程における生産要素と剰余生産物は価値体系、生産価格体系のいずれによっても評価しうるが、生産要素の評価の仕方によって剰余生産物の評価が異なる。ことにマルクスの労働価値論においては、この点は彼の搾取概念と切離すことができない基本問題である。

総産出ベクトルを z 、単位産出物ベクトルを生産する

ための物的投入係数行列と労働投入係数ベクトルをそれぞれ A 、 a_0 とすれば、 x を生産するために必要な生産手段と労働量は Ax と a_0x である。純生産物ベクトルを y とすれば、 y は

$$y = (I - A)x \quad (3)$$

である。労働価値体系では単位生産物価値 π は、投下された労働量と生産手段の価値の和であるから、

$$\pi = a_0 + \pi A \quad (4)$$

$$\pi = a_0(I - A)^{-1} = a_0 \sum_{i=0}^{\infty} A^i$$

で、純生産物の価値は

$$\pi y = \pi(I - A)x \quad (5)$$

となり、総労働量 L ($= \sum a_{0i}x$) に等しい。剰余生産物ベクトル s は、純生産物から労働者の得る消費財ベクトル c を控除したものであるから、その価値 πs は

$$\pi s = \pi(y - c) = L - \pi c \quad (6)$$

となり、総労働量から労働者の得る消費財の価値を引いたものに等しい。すなわち、労働者は労働 L を支出しながら c を生産するのに必要な労働量を超える剰余労働を

資本家に搾取されたことになる。

だが、ここに重要な問題がある。それは、資本家による剰余労働の搾取という把握が可能であるためには、新価値形成に関して生産手段は何ら寄与しないこと、いいかえれば新価値形成の要因を労働だけに限定することが必要であるという点である。(5)式から明らかのように、労働価値体系は純生産物価値を投下労働量に等しくする評価体系であるから、投下された生産手段が新価値形成の要因になることはできない。こうして、剰余労働の搾取というマルクスの概念は、新価値形成に関して労働のみが本源的であるとする見方と不可分である。

生産価格体系では事情は異なる。生産価格ベクトルを p 、均等利潤率を r 、単位労働当りの貨幣賃金率を w とすれば、生産価格は

$$p = (1+r)pA + wa_0 \quad (7)$$

とかける。 $w = 1$ とおけば、

$$p = (1+r)pA + a_0 \quad (7')$$

$$p = a_0(I - (1+r)A)^{-1} = a_0 \sum_{i=0}^{\infty} (1+r)^i A^i \quad (\text{if } r \geq 0)$$

であり、純生産物の価格は

$$p_y = p(I-A)s \geq L \text{ (if } r \geq 0) \quad (8)$$

である。また剰余生産物の価格 p_s は、

$$p_s = p(g-c) \geq r_0 \text{ (if } r \geq 0) \quad (9)$$

となり、利潤と剰余価値は一般に一致しない。すなわち生産価格体系では、剰余生産物は各資本に均等な利潤率を保証するように決定される価格で評価されるにすぎず、労働のみが新価値形成の要因であるとする見方はとられていない。それ故、生産価格体系では剰余労働の搾取という把握も不可能である。⁽¹⁰⁾ 生産価格体系において剰余労働概念が存在しないことと資本主義において搾取が隠蔽される事実とは表裏一体の関係にある。剰余労働の存在が資本主義の経済構造を基本的に支えていることはFMTの証明によってすでに明らかであるが、かかる把握は労働価値論によってのみ可能である。

2 SLCと価値

ヴァイツゼッカーの「価値」 \parallel SLCは彼の生産構造把握から導かれたものである。他方、マルクスの価値は(4)式に明らかなように技術係数のみによって決定されるのであって、特定の生産構造に限定されない。しかしな

がらここでは、SLCとマルクスの価値概念の相違を明らかにするために恒常成長を前提しよう。技術が不変であることも仮定される。

最初に資本家消費が存在しない場合を考えれば、恒常成長におけるマルクスの純生産物 y は、

$$y = c + gAa \quad (10)$$

で、必要労働は ca であり、剰余労働は $L - ca$ である。

ヴァイツゼッカーの「純生産物」 Y は、

$$Y = c \quad (11)$$

であり、「必要労働」は ca 、 $ca' = c(I - (1+g)A)a$ であるから、

$$Yc = ca(I - (1+g)A)^{-1}(I - (1+g)A)a \quad (12)$$

$$\parallel caa' = L (> r_0)$$

となり、総労働量に等しい。従って、資本家消費が存在しない場合には「剰余労働」はゼロである。

次に、消費財を二分割して $c = c_1 + c_2$ とし、 c_1 を労働者が、 c_2 を資本家が消費するとしよう。マルクスの必要労働は ca_1 であり、剰余労働は $L - ca_1$ となる。他方、ヴァイツゼッカーの「純生産物」 Y は、

$$Y = c_1 + c_2 \quad (13)$$

であるが、 g_2 は恒常成長を実現するために必要でなく、 g の値を引下げるだけの単なる浪費にすぎないと考えられるから、「必要労働」は II_{a_1} のみであり、

$$II_{a_1} = L - II_{a_2} (> \pi a_1) \quad (14)$$

で、「剰余労働」は

$$II_{a_2} = L - II_{a_1} (< L - \pi a_1) \quad (15)$$

となる。

かくして、ヴァイツェッカーの「搾取」は資本家消費に限られ、黄金成長径路においては消費財の「価値」は総労働量に等しくなり、「搾取」は存在しないことになる。また、資本家消費の存在如何にかかわらず、ヴァイツェッカーの「必要労働」はマルクスの必要労働よりも大きく、「剰余労働」は剰余労働よりも小さく評価されるが、これはヴァイツェッカーが成長を可能にする生産手段の増加分を「社会的必要生産物」に含めていることから生じる。

3 S L C と生産価格

価値と生産価格については同一の剰余生産物をどのように評価するかが問題であり、価値とS L Cについては剰余生産物の素材内容の違いが問題であった。生産価

格とS L Cに関しては、利潤率と成長率が一致する場合の蓄積率と実質賃金率の関係が分析対象となる。すでに述べたように、生産価格 p は

$$p = a_0 \sum_{i=0}^{\infty} (1+r)^i A^i \quad (7)$$

であり、S L C Π は

$$\Pi = a_0 \sum_{i=0}^{\infty} (1+g)^i A^i \quad (1)$$

である。従って、 $\Delta W/g$ に応じて $p/\Delta W \Pi$ となる。すなわち、資本家が利潤をすべて蓄積し最大の成長を実現するとすれば、価格はS L Cに一致する。この結果はヴァイツェッカーにとっては重大である。

所与の技術のもとで実質賃金率が与えられれば、生産価格と利潤率は一義的に決定される。今期の実質賃金率を ω とすれば、

$$p = (1+r)pA + \omega a_0 a_1 \quad (16)$$

で、経済の素材的構造は

$$s = (1+r)As + \omega a_0 a_2 \quad (17)$$

となる。成長率 g のとりうる範囲は $0 \leq g \leq r$ である。

次期に労働者が得る賃金率の範囲は今期の蓄積率によ

って決まる。今、労働人口が r の比率で増加しているとすれば、次期に同じ貸金率を与えるためには $(1+r)w_{t+1}$ の消費財が生産されねばならない。そのためには今期末に w_t の新投資が行われねばならない。すなわち資本家は今期の剰余生産物をすべて蓄積せねばならない。労働人口増加率が r より低ければ、剰余生産物をすべて蓄積することは労働者が次期により高い貸金率を得るための必要条件となる。

かくして、人口が増加する場合に労働者一人当りの消費を極大にするには、利潤をすべて蓄積することが必要である。ヴァイツゼッカーのSLCは、実質貸金率が所与のもとで人口増加率 g が利潤率 r に等しい成長径路における価格である。社会主義において一人当り消費を極大にすることが目標とされるならば、同じことを資本主義において実現するには資本家は利潤をすべて蓄積せねばならない。ヴァイツゼッカーは、資本制経済を一人当り消費の極大を実現するか否かの観点から眺める。恒常成長において $\pi = \Pi$ であれば、社会主義における目標は資本主義においても実現される。

四 ヴァイツゼッカーの搾取概念

1 技術が不変の場合

すでに明らかであるが、ヴァイツゼッカーにおいては社会体制の如何にかかわらず黄金成長径路では「搾取」は存在しない。彼の「搾取」は経済が黄金成長径路から乖離する場合に限られる。ここでの課題は、ヴァイツゼッカーの「搾取」理論がマルクス批判として有効であるか否かをマルクスの搾取概念と対比しながら検討することである。ここでは生産技術が不変であることを前提しておく。

経済の素材的構造を

$$x = (1+g)Ax + c_1 + c_2 \quad (18)$$

と設定しよう。 c_1 、 c_2 は労働者及び資本家の消費ベクトルである。ヴァイツゼッカーの「搾取」率 e_w は

$$e_w = \frac{L - \Pi c_1}{\Pi c_1} = \frac{\Pi c_2}{\Pi c_1} \quad (19)$$

である。他方、マルクスの搾取率 e_M は

$$e_M = \frac{L - \pi c_1}{\pi c_1} = \frac{\pi(gAx + c_2)}{\pi c_1} \quad (20)$$

表 3

$g=0, c_2=0$	$e_M=e_W=0$
$g=0, c_2>0$	$e_M=e_W>0$
$g>0, c_2=0$	$e_M>e_W=0$
$g>0, c_2>0$	$e_M>e_W>0$

である。 e_W をマルクスの価値を使
って表わせば、

$$e_W = \frac{L - \pi(g_A s + c_1)}{\pi(g_A s + c_1)}$$

$$= \frac{\pi c_2}{\pi(g_A s + c_1)} \quad (21)$$
 となる。(20)、(21)式を比べて e_M と e_W

の大小関係をまとめれば、表3のようになる。ヴァイツ
ゼッカーの「搾取」率がマルクスの搾取率と一致するの
は $s=0$ すなわち定常状態の場合に限られる。また、(1)、
(7)式から明らかのように、 $s=0$ 従って $e_M=0$ の場合に
はヴァイツゼッカーの「搾取」率は生産価格で表わして
も同じ値をとる。搾取に関するこのような両者の違いは、
それぞれの資本主義観の相違に基くものである。

ヴァイツゼッカーの「搾取」概念は、社会主義計画経
済において黄金成長経路が実現されると前提したうえで、
資本制経済をそれと対比することによって導き出された
ものである。従って、成長を可能にする生産手段の蓄積
は「必要生産物」とみなされ、資本家消費だけが成長率
を低下させる要因として「剰余生産物」とであると把握さ

れる。このことは逆に、資本主義において資本家消費が
なければ「搾取」は存在しないということになる。 $s=0$
の場合に、社会主義計画経済と資本制経済において相対
価格が一致することをヴァイツゼッカーが強調するのも
この点にかかっている。ヴァイツゼッカーの「搾取」は
一人当り消費の極大をめざす経済成長という問題視角か
ら定義されており、それぞれの社会体制の特殊な性格と
は密接な関連をもたない。

だが、マルクスの搾取概念は資本制経済に限定して定
義されたものである。それはまず資本主義的生産関係を
明らかにするものとしてある。マルクスは資本主義社会
が資本家と労働者からなる階級社会であると把握し、資
本制経済をこれらの階級の対立構造において分析するこ
とを試みた。

第一に、資本制経済の特徴はより多くの利潤を資本に
転化する事である。それは、社会主義的蓄積のように
一人当り消費を極大にすることを目的とするものではな
い。より多くの利潤の蓄積それ自体がめざされる。この
ような蓄積衝動は、他の資本家との利潤獲得をめぐる競
争戦に勝ち抜くために個々の資本家におしつけられる言

目的必然性である。資本主義においては蓄積そのものが自己目的化される。第二に、資本制経済においては剰余生産物の領有権と処分権は資本家に属する。資本家は等価交換の過程を通して利潤を獲得するのであるから、そこには資本主義的法秩序を乱す要因は一切含まれていない。従って、剰余生産物の資本家所有は保証される。社会主義においては剰余生産物は社会的に所有され、消費財生産を含めて労働者の福祉向上のために利用されねばならない。だが資本主義では、今期末に資本家が利潤をすべて蓄積するとしても、次期にそれが消費財生産の増加としてあらわれるとは限らない。蓄積のための蓄積が持続するかもしれない。資本家が蓄積率を高めることは、労働者がより高い賃金率を得るための必要条件ではあっても十分条件ではない。

搾取を定義するには必要労働を定義しておかねばならないが、この点についてヴァイツゼッカーは、「マルクスとマルクス主義者は、労働力の価値を計算する場合に労働力の成長率がゼロに等しいとインプリシットにしている。しかしこれは、単純再生産モデルすなわち定常経済についてのみコンシステントである。」と述べてい

る。すなわちヴァイツゼッカーは、資本主義において経済成長がある場合には、必要労働量に今期雇用されている労働者の生活資料の価値だけでなく次期に追加される労働者の生活資料の価値をも含めるべきであると主張するのである。だが、この主張はマルクス批判としてはミスリーディングである。次期に経済成長が行われるとしても、そのための蓄積は資本主義においては今期の剰余価値から支出されねばならない。資本家は価値増殖を図るために雇用労働者からより多くの剰余労働を搾取しようとする。経済成長はその結果として生ずるにすぎない。次期の成長のための資本蓄積部分を今期に雇用されている労働者からの搾取と把えるマルクスにとっては、ヴァイツゼッカーの右のような批判は無意味である。マルクスの問題関心は階級関係を正確に測定することであるから、必要労働は今期に雇用されている労働者の生活資料の価値に等しく、それ以外を含まない。

ヴァイツゼッカーは資本主義と社会主義を対比して、「もし我々が二つの経済システムに公平な取扱いをしようと思うならば、搾取率は二つのモデル経済において同じでなければならぬ。」と主張して、搾取から蓄積部

分を除く考え方を補強しようとする。ヴァイツェッカーのこの見解は、一切の生産プロセスが「最終生産物」たる消費財の生産へと同時進行する恒常成長を想定することによって導かれたものである。これに対しては、マルクスの次の見解を引用しておけば十分であろう。「決して忘れてはならないのは、この剰余価値の生産……が資本主義的生産の直接目的でもあれば規定的動機でもあるということである。それだから、この資本主義的生産を……享樂を直接目的とする生産とか資本家のための享樂手段の生産とかいうものとして描いてはならない。」⁽²³⁾資本主義の矛盾は単に資本家消費が存在することにあるのではない。剰余価値をめぐる資本家と労働者の階級矛盾が資本制経済を基本的に規定しているという認識に立つてこの階級関係を正確に叙述すること、これが搾取理論の役割である。

2 技術が変化する場合

前節では技術不変の場合のヴァイツェッカーの「搾取」概念を検討したが、それはマルクスの必要生産物の内容を変更したものであった。だが、黄金成長径路において労働投入係数が成長率と同じ比率で每期減少する経

済を想定すれば、マルクスの価値概念を採用しても正の利潤率とゼロの搾取率が両立するとヴァイツェッカーはいうのである。⁽²⁴⁾

労働者数が一定で、物的投入係数行列 A は変化せず、労働投入係数ベクトル a_0 が每期一定の比率で

$$a_0(t) = (1+r)^{-1} a_0(t-1) \quad (22)$$

となるように減少して労働生産性が上昇してゆく経済を想定しよう。生産価格、S L C、価値は(7)、(1)、(4)式よりそれぞれ

$$p(t) = (1+r)^{-1} p(t-1) \quad (23)$$

$$II(t) = (1+r)^{-1} II(t-1) \quad (24)$$

$$F(t) = (1+r)^{-1} F(t-1) \quad (25)$$

となる。労働生産性の上昇に比例して価値は下落してゆく。

ヴァイツェッカーは、マルクスの価値 π が次式で与えられるという。⁽²⁵⁾

$$\pi(t) = a_0(t) + \pi(t-1)A \quad (26)$$

すなわち、生産手段の価値を π 二期に体化された労働に等しいものとして価値決定式にもちこむのである。このような見方をとれば、(26)式より

(121) ヴァイツゼッカーの搾取概念

$$\pi(t-1) = (1+\gamma)\pi(t) \quad (27)$$

であるから、(27)式は

$$\pi(t) = a_0(t) + (1+\gamma)\pi(t)A \quad (28)$$

となり、 t 期の価値は

$$\pi(t) = a_0(t)(1 - (1+\gamma)A)^{-1} = a_0(t) \sum_{i=0}^{\infty} A^i (1+\gamma)^i \quad (29)$$

と計算される。成長率 g と労働生産性上昇率 γ が等しければ $\pi(t) = II(t)$ であり、利潤率 r と γ が等しければ $\pi(t) = p(t)$ である。 t 期の生産プロセスは $g = \gamma$ の場合には、

$$x(t) = (1+\gamma)Ax(t) + o(t) \quad (30)$$

$$x(t) = (1 - (1+\gamma)A)^{-1}o(t) = \sum_{i=0}^{\infty} (1+\gamma)^i A^i o(t)$$

となる。 t 期に投下される労働量 L は不変で、 $L = a_0(t)$

(29)であるから、搾取率 $e(t)$ は

$$e(t) = \frac{a_0(t)x(t) - \pi(t)o(t)}{\pi(t)o(t)}$$

で、(29)式から

$$e(t) = \frac{a_0(t)(1 - (1+\gamma)A)^{-1}o(t) - a_0(t)(1 - (1+\gamma)A)^{-1}o(t)}{\pi(t)o(t)} \quad (31)$$

となり、労働力が一定で、労働投入係数が成長率と同じ比率で每期減少する技術進歩が存在する場合には、 $\gamma > 0$ と $e = 0$ が両立するとヴァイツゼッカーはいうのである⁽²⁶⁾。

この結論は、(29)式によって価値を定義することによって導かれたものである。だが、これは $g = \gamma$ の場合のSLCに他ならない。なぜなら、(29)式の γ を g におきかえれば

$$\pi(t) = a_0(t)(1 - (1+g)A)^{-1} = II(t) \quad (1)'$$

が得られるからである。ヴァイツゼッカーは、マルクスの価値を生産手段の生産のために過去に投じられた労働と生労働の和と解すこと⁽²⁷⁾によって、SLCとの一致を見出したのである。だが、マルクスの価値は「体化された労働価値」ではなく、現在の標準的生産方法のもとで商品の再生産に要する労働量によって決定される⁽²⁸⁾。すなわち、技術進歩があったとしても t 期のマルクスの価値は、

$$\pi(t) = a_0(t) + \pi(t)A \quad (4)$$

$$\pi(t) = a_0(t)(I-A)^{-1} = a_0(t) \sum_{i=0}^{\infty} A^i$$

によって決定されねばならない。それ故マルクスの搾取率 $e_M(t)$ は、

$$e_M(t) = \frac{a_0(t)x(t) - \pi(t)c(t)}{\pi(t)c(t)} \quad (32)$$

$$= \frac{a_0(t) \sum_{i=0}^{\infty} (1+\gamma)^i A^i \cdot c(t) - a_0(t) \sum_{i=0}^{\infty} A^i \cdot c(t)}{\pi(t)c(t)}$$

となり、 $\gamma < 0$ である限り $e_M(t) < 0$ であり、FMTは何ら侵害されない。

かくして、マルクスの搾取概念を変更することによってマルクス批判をなそうとしたヴァイツェッカーの試みも、マルクスの価値の定義を採用すると称してFMTに対するアンチテーゼをうち出そうとした彼の試みも、いずれも不成功に終わった。

五 結論

ヴァイツェッカーの問題関心は、恒常成長の観点から

資本制経済と社会主義計画システムを眺めることである。このような立場から定義された「価値」は、一種の計画価格としてオペレーションナルな機能をもつ。計画目標として恒常成長を維持しながら一人当り消費を極大にすることが想定されるならば、この「価値」で表現される「搾取」は、経済の黄金成長径路からの乖離を表わすものとなる。この観点から資本主義を見れば、経済が黄金成長径路を辿ることを阻止する要因は、成長率を引下げらるものとして不生産的な資本家消費であると把握される。ヴァイツェッカーの観念に存在する資本制経済の矛盾は資本家消費のみである。

だが、マルクスの問題関心は、諸資本の競争の結果として生じた素材的構造を資本・賃労働の階級関係を明らかにするという視角から分析することであった。従って、そのために用いられる分析用具としての価値は計画価格としての機能をもたず、特定の生産構造も想定していない。それは現在の標準的生産条件のもとで商品を再生産するために必要な労働量によって決定され、階級分析に役立てられる。ヴァイツェッカーがマルクスの価値の定義を採用すると称して定式化した「搾取」率もSLCに

よるものにすぎず、マルクスの搾取概念に対する批判として成功していない。搾取を消費財取得の不平等に限定し資本主義的生産関係の特殊性を認識しえないヴァイツゼッカーがこのような結果に至るのは必然的であろう。新古典派成長理論の枠組の中にマルクスの経済学をその資本主義認識をも含めて包摂するのは容易なことではないのである。

(1) 例えば、「マルクスは、自分のいう価値を手順として使用しなかったから価格関係の演繹に失敗したと、古典派の著者たちを非難しているのではない。むしろ、くりかえしてなされてくる非難とは、彼らが『この現象形態』だけを問題としたらどうかである。」Baumol, W. J., "The Transformation of Value: What Marx 'Really' Meant (An Interpretation)," *Journal of Economic Literature*, Vol. 12, No. 1 (March 1974), ホーギン・W・J・「価値の転形——マルクスの『真意』(一解釈)」伊藤誠・桜井毅・山口重克編訳『論争・転形問題』東京大学出版会、一九七八年、所収。

(2) Okishio, N., "A Mathematical Note on Marxian Theorems," *Wirtschaftliches Archiv*, 1963, pp. 287-99. Morishima, M., *Marx's Economics*, 1973, chap. 5. 森嶋通夫『マルクスの経済学』高須賀義博訳、東洋経済新報

社、一九七四年、第五章。

(3) 転形問題の総括としては、高須賀義博「転化論の展望」、『経済研究』第二七卷第二号、一九七六年四月、高須賀義博『マルクス経済学研究』、新評論、一九七九年、所収、を参照。

(4) Weiszäcker, C. C. von, "Modern Capital Theory and the Concept of Exploitation," *Kylos*, May 1973.

(5) Steedman, I., *Marx after Sraffa*, 1977.

(6) アルバート・L・「三大経済学派の限界と揚棄」、『季刊クライシス』創刊号、社会評論社、一九七九年秋、所収。

(7) 馬渡尚憲「価値論論争の現地点」、『経済評論』、日本評論社、一九七九年一月号、一四四頁。

(8) 結合生産を含む一般的なモデルについては、Morishima, M. and Catephores, G., *Value, Exploitation and Growth: Marx in the Light of Modern Economic Theory*, 1978, chap. 2. 森嶋通夫・カナフキョウ・G・『価値・搾取・成長』高須賀義博・池尾和人訳、創文社、一九八〇年、第二章、を参照。

(9) Weiszäcker, op. cit. p. 247.

(10) ヴァイツゼッカーは資本家の労働を想定していないから、本稿では消費財取得の不平等は資本家消費が存在するとして取扱われる。

(11) Weiszäcker, C. C. von, *Steady State Capital Theory*, Berlin, 1971, p. 22.

- (12) Weizsäcker, *ibid.* p. 22.
- (13) Weizsäcker, *ibid.* p. 24.
- (14) 本稿の想定では、これは今期末に得られる消費財である。
- (15) Weizsäcker, *op. cit.* p. 23.
- (16) Wolfreiter, E., "Surplus Labour, Synchronised Labour Costs and Marx's Labour Theory of Value," *The Economic Journal*, Vol. 83, No. 331, September 1973, p. 793.
- (17) Weizsäcker, *op. cit.* p. 25.
- (18) Weizsäcker, C. C. von and Samuelson, P. A., "A New Labour Theory of Value for Rational Planning through Use of the Bourgeois Profit Rate," *Proceedings of the National Academy of Sciences*, June 1971, ヴァイツゼッカー、C. C. von、サムエルソン、P. A.、「ブルジョアの利潤率を導入した合理的計画のための新しい労働価値論」、篠原三代平・佐藤隆三編集『サミュエルソン経済学体系』第九巻、勁草書房、一九七九年、所収。
- (19) 新古典派においても剰余労働概念が認められていたとフュルステイードマンの見解は誤りである。Steedman, *op. cit.* p. 58.
- (20) 「利率率が成長率よりも大きい限り、搾取する階級を資本家階級であると考えることができる。」Weizsäcker, "Modern Capital Theory and the Concept of Exploitation," p. 255.
- (21) Weizsäcker, *ibid.* p. 264.
- (22) Weizsäcker, *ibid.* p. 264.
- (23) Marx, K., *Das Kapital*, フルンズ、K.『資本論』『フルンズ・エンゲルス全集』大月書店、一九六六年。第三部(一九四四年)第二五巻、三〇六頁。
- (24) Weizsäcker, *op. cit.* p. 272.
- (25) Weizsäcker, *Steady State Capital Theory*, p. 27.
- (26) 置塩氏は「ヴァイツゼッカーの「価値」の定義と利潤率の定義が整合的であると主張する。すなわち、もし価値を
$$v = p \cdot ((1+r) + r^2 A + a)$$
と定義すれば、それに整合する利潤率は、
$$r = \frac{p}{(1+r) + r^2 A + a}$$
と定義されねばならぬ」と、 $r = 0$ と $e = 0$ の両立を導く。置塩信雄『フルンクス経済学』築摩書房、一九七七年、一六二―六頁。この見解は、ヴァイツゼッカーの議論を一貫させるためには生産手段の増加分を資本コストの一部として計上せねばならぬという正当な指摘である。
- (27) この点はヴォルフシュネッターもふれてゐる。Wolfshuetter, *op. cit.* p. 806.
- (28) この点は、近代経済学における「現在財と将来財の価値の相違」の問題に関わる。根岸氏にもマルクスの労働価値論に対するヴァイツゼッカーと同様の誤解がある。根岸隆「近代経済学からみた労働価値説」、佐伯尚美・佗美光

(125) ヴァイツゼッカーの搾取概念

彦・石川経夫編『マルクス経済学の現代的課題』、東京大
学出版会、一九八一年、一一七―一二二頁。

(一橋大学大学院博士課程)